

佐藤史人の音楽科（第4学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

音楽科では、主体的に感性を働かせて音楽のよさを味わいながら、生活の中の音楽に豊かにかかわる資質・能力を育むことが一層求められている。また、グローバル化する社会において、他国の文化を理解し良好な関係を築いていくために、自国の文化・伝統を知り、日本人としての自覚をもつことが期待されている。

中教審答申では、「我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと」の「更なる充実が求められる」と示された。これを受け、次期学習指導要領では、これまで第5学年及び第6学年において取り上げる旋律楽器として例示していた和楽器を、第3学年及び第4学年にも新たに位置付けることとした。そして、我が国や郷土の音楽の指導に当たっての配慮事項として、「音源や楽譜等の示し方、伴奏の仕方、曲に合った歌い方や楽器の演奏の仕方などの指導方法を工夫すること」を新たに示したことは、特筆すべき点の一つである。

これらの動向を踏まえ、私は、第4学年の音楽づくりにおいて、我が国の音楽を教材として、**音楽を形づくっている要素の特徴を生かした表し方を考え、イメージに合った音楽をつくる子ども**を目指す。具体的には、我が国の音楽を教材として、音楽を形づくっている要素（音色、リズム、旋律、音階、反復、変化等）を聴き取り、よさや面白さ等を生かした表し方を考え、自分のイメージに合った音楽をつくる子どもの姿である。

従来我が国の音楽を教材とした音楽づくりの指導でも、音楽を形づくっている要素の特徴を生かして、イメージに合う音楽をつくらせようとしてきた。しかし、どう表現しようかなと迷いながら音楽をつくって表現する子どもの姿が見られた。音楽を形づくっている要素の特徴を音楽表現に生かしていないのである。または、自分のイメージと音楽表現を関連付けることができないのである。

音楽を形づくっている要素の特徴を音楽表現に生かさない原因は、子どもが、その特徴について、体験を通した理解まで至っていないことである。例えば「日本の音楽を代表する『さくら さくら』はミファラシドの音で演奏されています。この五音を日本の音階と言います。なるべく隣同士の音をつなげて旋律をつくりましょう」というように、特徴には目を向けさせるものの、その特徴について十分理解させないまま音楽づくりをさせるような指導が考えられる。実際に五音を隣の音につなげて演奏するとどんな表現になるのかよく分からない子どもは、単に音を並べたり、意図の無い旋律づくりを行ったりと、特徴を生かすことができなかったのである。

自分のイメージと音楽表現を関連付けることができない原因は、イメージが曖昧なまま音楽づくりをさせていることである。例えば「この日本の音階を使って旋律をつくりましょう」と既存の知識や経験だけで音楽づくりを促されても、こんな感じの音楽をつくりたいなというイメージが具体的にもてない子どもは、どの音を使ってどう表現すればいいのか迷ってしまうのである。

そこで、私は、次のように題材を構想する。我が国の音楽を鑑賞したり和楽器を演奏したりして体験を通した理解を行っただけで、まず、我が国の音楽のような旋律や合奏をつくりたいと思うような文脈を設定する。次に、学習方法を考えさせ、音楽づくりの見通しをもたせるように働き掛ける。そして、子どもが、複数の音楽表現を比較することで、音楽を形づくっている要素の特徴を味わえるように働き掛ける。また、イメージを想起する言葉に着目しながら、具体的な音楽のイメージをもてるように働き掛ける。このように授業を展開することで、目指す姿を実現する。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
<ul style="list-style-type: none"> ○音楽を形づくっている要素の働きについての実感に伴う理解 ○即興的に表現する技能 ○仕組みを用いて音楽をつくる技能 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の表したいことについて見通しをもって発想・構想する力 ○自分のイメージに合わせて音楽表現を考える力 	<ul style="list-style-type: none"> ○進んで音楽にかかわり、協働して音楽活動しようとする態度 ○進んで様々な音楽に親しもうとする態度

3 主張する働き掛け

まず、音楽づくりの題材の前に、音楽科で発揮させたい資質・能力との関連を考えた題材や他教科等の単元を学習させ、関連のある資質・能力を自覚させておく。

音楽づくりの題材では、まず教師が音楽をつくりたいと思うような文脈を設定する。子どもは、音楽をつくってみたいと考える。

働き掛け1

音楽のモデルを2曲提示し、どちらのモデルがイメージに合っているかと問うた後、つくりたい音楽について記述させる。

イメージに合う音楽をつくりたいという問いをもたせるための働き掛けである。
子どもは、2つのモデルを聴き比べながら、**音楽を形づくっている要素に着目する**という「見方・考え方」を働かせて音楽を形づくっている要素を聴き取り、「こっちのモデル方が合っている」と考える。そして、進んで様々な音楽に親しもうとする態度（**音楽科③態度**）を発揮して、「自分もイメージに合う音楽をつくりたい」等と述べ、音楽をつくりたいと考える。

働き掛け2
音楽をつくるためにどの楽器を使うとよさそうかとその理由を問い、音楽づくりの時間を設定する。

見通しをもたせ、音楽づくりさせるための働き掛けである。
子どもは、**音楽を形づくっている要素に着目する**という「見方・考え方」を働かせて、既存の知識・技能を基に、自分の表したいことについて見通しをもって発想・構想する力（**音楽科②思考力・判断力・表現力**）を発揮し、根拠を明確にして楽器を選ぶ。そして、楽器を使いながら音楽づくりに取り組む（**音楽科①知識・技能**）。

働き掛け3
発表を聴き合うポイントについて問うた後、中間発表会を設定する。

作品をよりよくする視点をもたせ、改善点に気付かせるための働き掛けである。
子どもは、**音楽を形づくっている要素に着目する**という「見方・考え方」を働かせ、作品をよりよくする視点をもつ。そして、中間発表会を通して、グループで互いに作品を聴き合い、気付いたこと伝え合いながら学習シートに記述する（**協働性**）。

働き掛け4
再び音楽づくりの時間を設定する。

音楽表現を工夫しながら音楽づくりさせるための働き掛けである。
子どもは、**音楽を形づくっている要素に着目する**という「見方・考え方」を働かせ、自分のイメージに合わせて音楽表現を考える力（**音楽科②思考力・判断力・表現力**）を発揮して音楽表現を工夫しながら音楽づくりをする。
このようにして、子どもは、音楽づくりを進め、作品を仕上げていく。また、グループ内で演奏する様子を録画し合いながら、よりよくなった作品を記録していく（**ツール活用能力**）。

働き掛け5
完成発表会を設定し、音楽作品の特徴を振り返りシートに記述させる。

音楽づくりで発揮した資質・能力を自覚させるための働き掛けである。
子どもは、完成した音楽作品を発表する（**音楽科①知識・技能**）。一連の学習を通して、**音楽を形づくっている要素の特徴を生かした表し方を考え、イメージに合った音楽をつくる子ども（C_n）**になる。また、振り返りシートに音楽作品の特徴を記述し、音楽づくりで発揮した資質・能力と、その結果どのような作品をつくることのできたのかを自覚する。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したC_nになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4と5を受けて、イメージに合った音楽をつくることのできたかどうかを、発言や記録動画や学習シート、振り返りシートの記述から検証する。
- ② 働き掛け1と2と3と4を受けて、想定した「見方・考え方」を働かせて、音楽を形づくっている要素に着目しているかどうかを、発言や学習シート、振り返りシートの記述から検証する。
- ③ 働き掛け1と2と4と5において、想定した資質・能力が発揮されたかどうかを、発言や記録動画や学習シート、振り返りシートの記述から検証する。

5 年間の授業計画

- | | | |
|-------------|------|------------------------------|
| (1) 指定研究授業 | (7月) | 俳句に音楽を♪-日本の音階を使って旋律づくり-(6時間) |
| (2) 中間検討会 | (9月) | お月見の音楽-日本の音階を使って旋律づくり-(6時間) |
| (3) 初等教育研究会 | (2月) | 百人一首の歌をつくらう-日本の音楽に親しもう-(6時間) |